書字行為の個体発生

プライベートスピーチと書字の生起タイミングの微視的分析

石本啓一郎

(立教大学大学院文学研究科)

キーワード：書字行為、プライベートスピーチ、個体発生

Ontogenesis of writing action: Micro-analysis on inscribing and private speech in early childhood

Keiichiro ISHIMOTO

(Graduate School of Arts, Rikkyo University)

Key Words: writing action, private speech, ontogenesis

目 的

子どもは書字行為の発達過程において、言葉 (speech) を話すだけでなく書くようになり、言葉との関係を再構築する (Выготский, 1934/2001)。書字行為を遂行するためには、連続した音声として話される言葉を、仮名文字であれば音節に分解してその音節を象徴する文字を記し、複数の文字 (= 音節) を連ねることによって意味ある単語や文を記すことが求められる。この「音節を書く」という書字行為の発達を検討するために、本研究では幼児が音節をつぶやきながら音節を書くという事実に着目し、書字行為における音節の「つぶやき」(プライベートスピーチ: Berk, 1992; Winsler, 2009) が発せられるタイミングの変化を記述することを目的とした。

方 法

石黒・石本 (2012) の実験を再分析した。

実験協力者 年少群 20 人 (R: 3:4~4:3, M: 3:10)、年中群 20 人 (R: 4:4~5:3, M: 4:10)、年長群 20 人 (R: 5:4~6:4, M: 5:10)、小 1 群 20 人 (R: 6:5~7:4, M: 6:10)、合計 80 人 (M: 5:4)。

手続き 実験は個別に行われ、実験者は実験協力者に紙と鉛筆を渡して「これから言う文をあつて思い出せるようにこの紙にかいてください」と教示し、8 つの文 (例: 「たくさんの星がキラキラと光っています」) を読み上げた。1 文毎に 1 枚の紙が与えられた。8 つの文は相互に関係のない叙述文であった。これを 2 セット (計 16 文) 実施した。

分析 実験協力者は口頭で呈示された文をかく時、なぐりがきや絵画など多様なインスクリプションを産出していたが、本研究では仮名文字 (「非正規配列文字」「正規配列文字」(石黒・石本, 2012)) を産出した子どものみ分析対象とした。全 16 文中一度でも仮名文字を書いた子どもは、年少群 1 名、年中群 3 名、年長群 11 名、小 1 群 20 名、計 35 名であった。その子ども達が文字を書いている場面を映像で確認したところ、「書字時に一音ずつ区切った音節単位での発声 (= 音節の発声) をしている子ども」は、年少群 0 名、

年中群 0 名、年長群 10 名 (R: 5:7~6:1, M: 5:10)、小 1 群 8 名 (R: 6:5~7:2, M: 6:9)、計 18 名 (M: 6:3) であった。この子ども達が、音節をつぶやきながら文字を書いていく過程を微視的に分析した。子どもが「一文字を書き始める時点」を Adobe 社製 Premiere Elements 9 で 1/30 秒ごとにコマ送りして特定し、その時点に対して何秒前・後に、その文字の「音節の発声」が見られたかをプロットした。「音節の発声」も同様に 1/30 秒ごとにコマ送りし、音声の波形と聞こえてくる音声に基づいて、音節が発声された開始点を特定した。本分析では、一人につき一文を抽出し、計 18 名の個体がそれぞれ一文 (計 18 文) 書く過程を微視的に分析した。

結 果

「音節の発声」は計 219 回見られた (単語単位の発声は計 6 回、文単位の発声は計 15 回、その他の形式の発声は計 7 回であった)。Figure 1 の縦軸は月齢順に並べられた個体で、横軸は「一文字を書き始める時点」を基点とした「音節の発声」が現れた時点である。例えば「1 [-1]」は、基点に対して 1 秒 0/30 秒 (1:00) 後 [前] から 1 秒 29/30 秒 (1:29) 後 [前] までの時間を示している。基点は格子縞の縦線で示されている。基点に対して「音節の発声」が見られたタイミングを白 (□) と黒 (■) でプロットした。白は一個体に 1 回のみ、黒は一個体に複数回見られたことを意味する。Figure 1 を見ると、年長児の「音節の発声」は基点の左右に広がっているが、年齢の上昇とともに基点に寄っていくことが分かる。また、書字速度も年齢の上昇とともに大きく変化していた。文字を書き始める各時点の間の時間を算出すると、年長群が平均 8.38 秒であるのに対して、小 1 群は平均 2.41 秒であった。

考 察

1) プライベートスピーチはプランニング機能を果たす (Wertsch, 1979; Winsler & Naglieri, 2003) ため、書字前 (基点の左) の「音節の発声」は、その音節を表わす文字形態を特定するための発声であると考えられる。2) 書字後 (基点の右) の「音節の発声」は、既に書いた文字を読み、次に書く音節と文字形態を特定するための発声だと考えられる。3) 書字途中 (基点の直ぐ右) の「音節の発声」は、2 と機能的に類似しており、次に書く音節と文字形態を特定するための発声だと考えられる。この発声が多く見られる小 1 群は速く滑らかに文字を書くが、その滑らかな行為が可能になるのは次に書く「文字 (音節)」だけでなく「単語」や「文」の単位にも意識を向けているためであろう。プライベートスピーチは次第に短縮されて内言化する (Goudena, 1992) ため、この「音節の発声」は単語や文の短縮形であることが示唆される。

Figure 1 仮名文字を書き始める時点に対する音節の発声のタイミング